



「ピアノ教室が変わる 理想の生徒が集まる7つのヒント」

藤 拓弘 著
(音楽之友社 1680円)

ピアノ教師にも必要な自己プロデュース術を伝授

今や少子化の時代……ピアノ教師を務める人たちが過した子供時代とは社会も変わり、親離れの時期も遅くなるなど子供の精神的な発達具合も変わり、「教師・生徒・保護者」の人間関係も以前とはその様相をまったく異にしている。そのような中で、ピアノ教育の在り方を真剣に模索し、悩んでいる教師も多いはずである。

著者は、「ピアノ講師の仕事術」などの著書をはじめ、ピアノ教室運営を専門としている。「理想の生徒が集まる7つのヒント」の副題の通り、本書は「教室」「生徒募集」「レッスン」「生徒」「保護者」「先生」「毎日」が「変わるヒント」による7章構成。

著者の理想の教室とは、理想の生徒が集まる教室であるという。「何かをよくしたいと思ったときは、まず『自分』が変わらなければいけない」と著者は説く。変わりたいと思っても、自分をどう変えればいいのか分からない人も多いはず。写真をはじめとした具体的な例が豊富に掲げられているのも、本書の大きな長特である。その1つひとつの例は、当たり前のことのように思われるが、著者の言葉は読者に多くのことを気付かせてくれるだろう。例えば、生徒への呼びかけにしても、生徒が「○○さん」と名前では呼ばれると教師に親しさを覚えるであろうし、反対に「あなた」と呼ばれると教師との心の距離を感じるかもしれない。ましてや「あんた」呼ばわりされれば、蔑まされた気分になるに違いない。生徒や保護者の価値観も認め、相手の心を開くことも、生徒や保護者とのより良い関係を築くきっかけになると思う。また、ホームページによる生徒募集の例では、教師の抱く思いをどのように伝えるかなど、アピールの方法もわかりやすく示されている。巻末の「ピアノ教室・防災マニュアル」は必読。

本書は、自分をいかにプロデュースするかという術を教えてくれる。(道下京子)



「父・バルトーク 息子による大作曲家の思い出」

ペーテル・バルトーク 著 村上泰裕 訳
(スタイルノート 4200円)

理想的な父、「特別な」人間バルトークが多面的に立ち上る

20世紀を代表する作曲家ベラ・バルトークの次男、ペーテル・バルトークが著した父の回想録である。この種の書物は記述者と対象との距離感が問われるものだが、ペーテルは楽才に代わって文才に恵まれたか、デリケートな筆致を用いて巧みに距離感を使い分けながら、父の生活や人生を冷静な観察者としての眼で淡々と叙述する一方、父子だった者にしか描けない、きわめて親密な部分も含めて自分との関わりをさりげなく綴っていく。その意味で、この著作からは人間としてのバルトーク像が多面的に立ちのぼってきて読者を飽きさせないし、この作曲家に興味を覚える人の知的好奇心を満足させる上でも十分な内容に仕上がっていると言っていいだろう。

バルトークは、その知的で繊細な風貌そのままに、さまざまな分野の知識を貪欲に吸収し、それらの本質をかみくだいて息子に授ける術に長けた理想的な父親だったようだ。天文、植物、言語、数学……彼はすぐれた洞察力で各事物の構成原理を看破し、その成り立ちを紐解いて自分のものにしてしまう。特に言語能力の高さは特筆もので、民謡収集の必要性からトルコ語が必要になった際には、わずか数カ月の独学でこの特殊言語をマスターするだけでなく、比較言語学的な観点からハンガリー語との関連を独自に見い出したりもしている。父への尊敬の念というバイアスがかかっているにしても、確かに彼は「特別な」人だったに違いないと思わせるに十分な記述が後から後から目白押しだ。もちろん、音楽をめぐるエピソードには事欠かない。《ミクロコスモス》の誕生過程がリアルに描かれているのも面白いし、コダーイをはじめ同時代の音楽家たちとの関わりもふんだんに登場する。貴重な演奏会の資料や写真、あるいは父の書簡なども所収して、バルトークを研究しようとする者にとっても第一級の資料となり得るだけの内容だ。良書である。(吉村 溪)



「木琴デイズ 平岡養一『天衣無縫の音楽人生』」

通崎睦美 著
(講談社 1995円)

「世界一の木琴奏者」の波乱の生涯を同業者の視点で

京都を拠点に演奏活動が続けるとともに、エッセイストとしても才を発揮する通崎睦美が新しく手掛けたのは木琴奏者・平岡養一の評伝だ。

平岡養一の名が今どのくらい知られているのかはわからない。現在の50代なら辛うじて知っている程度か。そもそも木琴にしているが、「モッキン」との語そのものは知っていても、誤解されていることがほとんど。

著者は平岡養一の生涯をたどる。生まれ、家系、木琴との出会いを。デビューから渡米、アメリカでの活動、第二次世界大戦による帰国、この列島での日々を。そしてあらためてアメリカへ向かい、行き来する晩年を。評伝の定型を踏まえながら、はしばしに、へえ、こんなことが！と驚かされるようなことが書きこまれている。

とはいえ、本書の特質はそうしたところにはない。著者はもともとマリンバの演奏家だ。それが、近年平岡養一の楽器を身近におけるようになって、木琴奏者として活動している。小さな形容できるかもしれないが転身は転身だ。そのきっかけとなった平岡養一が題材になるのはわかる。しかし、著者は単に事実を調べ、客観的にみるだけではない。録音資料や平岡自身の書きこみがある楽譜も横におきながら、昭和初期という時代、日本とアメリカ合衆国、といった文脈に演奏家をおきなおし、さらに、現在の演奏法、教育や教養のあり方、音そのものについての考え方などを考慮に入れて同業者としての平岡養一論となる。さらには木琴とマリンバの違い、その歴史的な背景についても、だ。そのときどきに顔をだす通崎睦美自身の位置や考えが、多くのノンフィクションや伝記とは異なった色合いを本書に与える。そしてその部分こそが、なぜ平岡養一を書かなくてはならないか、この著者でありこの対象であるかを明確に伝えてくれる。(小沼純一)